

リポート Report

大磯町郷土資料館だより

1996・3・30

13

もくじ

◇鉄道が遺したものたち	2
◇箱根の別荘地開発	4
◇舟窪のサイトバライ～復活した飾り～	8
◇平成7年度の収集資料について	9
◇海と山と人と②	10
◇トピックス	11
◇お知らせ／資料の受入／行事案内	12



講義記録

平成7年度の郷土史講座が、去る2月3日(土)、17日(土)の2回にわたり、大磯町郷土資料館および箱根町立郷土資料館において開催されました。今回の講座は、中教育事務所の主催する湘南オープンカレッジを兼ねておこなわれ、大磯町、二宮町、平塚市、伊勢原市、秦野市などから多数の参加者があり、『西相模の近代史』をメインテーマに、第1回目は大磯町郷土資料館学芸員の國見徹氏より『鉄道が遺したものたち』と題した講義を、第2回目は箱根町立郷土資料館学芸員の鈴木康弘氏より『箱根の別荘地開発』と題した講義をしていただきました。お二人のお話は、それぞれに綿密な調査研究を基にした、たいへん興味深い内容となりました。そこで本紙上において講義の概要をまとめました。

西相模の近代史 ①

鉄道が遺したものたち

國 見 徹

歴史学は文献史学と物質史学に大分され、考古学は物質史学に該当します。考古学は、「大昔」を対象とすると思われがちですが、「昨日まで」が対象であると定義付けられ、近年では近世以降の調査も進んでいます。本講座では、近代史のテーマのもとで、近代に大きく貢献した鉄道に関わる物質資料を紹介していきます。

鉄道網の整備と変革

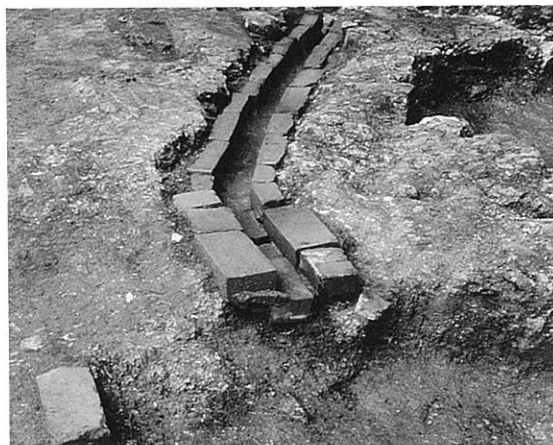
明治5年、新橋・横浜間に鉄道が開通しました。東京と神戸を結ぶ東海道線は、明治20年には横浜・国府津間が開通、同22年には全線が開通しました。当時、鉄道は、極めて画期的な輸送手段でした。近世まで、人の移動は基本的に徒歩で、物資等規模の大きな輸送手段は船による海上輸送が中心でした。鉄道は初めて陸上における大量の人や物資の輸送を可能にしました。容易となった人や物資の輸送は、多くの産業の発

達に寄与していきます。それはまさに、「富国強兵・殖産興業」という明治の掛け声にも合致していたといえるでしょう。

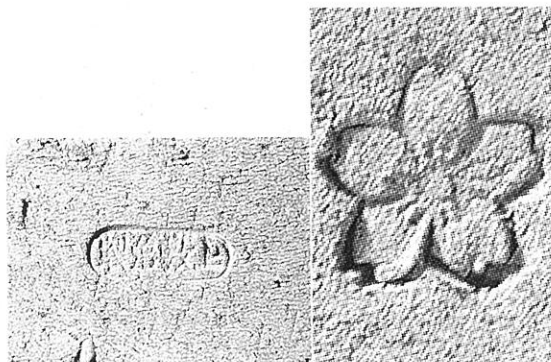
構造物の主役 — 赤煉瓦と耐火煉瓦 —

鉄道の敷設に伴って建設されていくトンネルや、橋脚等の施設に、煉瓦が用いられるようになります。また、鉄道以外の建築資材としても多用されます。煉瓦造りの建物は、火災に対して強いことも注目された要因の一つだったようです。これらの建築用に用いられた煉瓦は、その色から赤煉瓦と呼ばれます。赤煉瓦はその製作技法の変化や施された刻印が、製造した場所や時代を知る手掛りとなります。

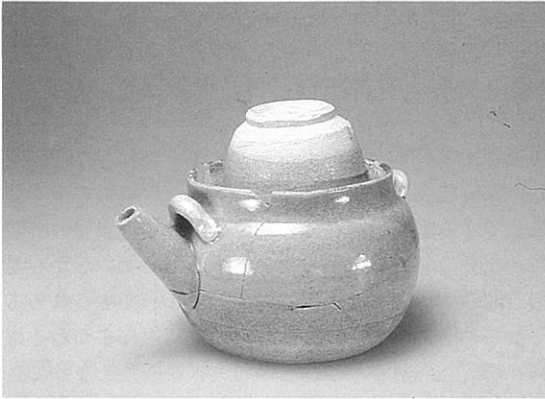
一方、同じ煉瓦でも、全く違う用途の煉瓦があります。俗に『白煉瓦』と呼ばれる耐火煉瓦です。溶鉱炉などに使用される耐熱性の高い煉瓦で、原料・製法も赤煉瓦と異なる特殊な技術が要求されます。近代の重



煉瓦遺構 (神明前遺跡)



赤煉瓦刻印



汽車土瓶

工業の発展にも深く関わる資材ということが出来ます。また、大磯でも各所で見つかっており、別荘内の竈・暖炉等に使用していたことも考えられます。これら資材としての煉瓦を運ぶためにも鉄道が使われ、また、逆に鉄道による輸送が可能になったことによって、大規模な開発を進めることができたのだと思われます。

駅売弁当の開始と汽車土瓶

鉄道によって人の移動が活発になるにつれ、鉄道に関わる様々な商売が成り立つようになりました。その一つに駅売弁当、いわゆる駅弁があります。弁当を売るという行為は、それ以前にも芝居や花見の席で行なわれていましたが、旅客相手に弁当の販売が行なわれたわけです。明治10年頃から駅弁の販売が開始されたといわれ、近在では明治21年に国府津駅で販売が開始されており、この時の弁当は握り飯と香の物を竹皮で包んだものだったようです。弁当とともに、茶の販売も行なわれました。茶は、弁当に付随する奉仕品としての性格が強かったようです。茶は蓋付の土瓶に入れ湯呑を付して販売されました。この土瓶は汽車土瓶と呼ばれます。汽車土瓶は明治20年代に発生した後、幾度かの画期を経て器形・材質・製作技法などの変遷をみます。使い捨て商品であったため、汽車土瓶は廉価にかつ大量に生産・販売されました。しかし、昭和30年代に登場する合成樹脂製の茶瓶によって駆逐され、姿を消してゆきます。しかし、汽車土瓶にとって替わった合成樹脂製茶瓶も、早くも消え去ろうとする運命にあります。近年、著しく普及した罐入りの茶におさわれているためです。少なくとも合成樹脂製茶瓶までは素材の変化はあっても、基本的な形態は汽車土瓶を引き継いだものでしたが、罐入り茶の台頭は、鉄道によって生まれた独特の茶販売形態を駆逐していくこととなります。



合成樹脂製茶瓶

おわりに

大磯駅からほど近い神明前遺跡では、明治期の遺構として、煉瓦による導水施設が検出されました。また多くの遺物に交じって汽車土瓶も出土しています。このように、近年、鉄道そのものの遺構以外からでも、鉄道に関わる多様な資料を見出すことができます。大昔ではない、新しい時代のことが、意外に不明な場合が多く、特に、大量に生産されたものほど伝世せずそれゆえに忘れ去られてしまうことが多いのです。

(当館 学芸員)

【表紙写真】

サイトバライの飾り

大磯町虫窪の舟窪道祖神の祭り（サイトバライ）のときに作られる飾り。豊作や子孫繁栄を願って、ダイコンで男女の性器を形どったもの。このたび、ほぼ20年ぶりに復活した。

(8頁参照)

箱根の別荘地開発

西相模の近代史というテーマのもと、きょうは箱根の別荘地開発についての話をいたします。きょうお集まりの皆さんは、県央部にお住まいの方々ですので、もちろん箱根には何度かいらっしゃっているでしょうが、やはりどちらかというと、箱根を外からご覧になっているのではないかと思います。きょうは、箱根の近代の歩みの中で、別荘地としての開発を通して内側から見た箱根を少しでもお話できたらと思います。

箱根七湯から箱根十七湯へ

—近代観光開発の諸相—

箱根に新しい保養施設としての「別荘」が見られるようになるのは近代になってからのことですが、そのほとんどが「温泉付」であることがひとつの特徴であると思います。そのため、別荘地開発の前段として、温泉の話をしておかなければなりません。

現在箱根には「十七湯」といって町内に十七の温泉場があるのですが、中でも湯本、塔之沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦之湯は歴史も古く、江戸時代には「箱根七湯」と総称されていました。これらは、自然に温泉が湧き出すような場所でしたから、早くから温泉利用が見られたのでしょう。やがてそこでは温泉を使用する湯宿が整備され、次第に温泉場が形成されていきました。この温泉場の状況を知る上で格好の資料が、江戸時代の文化年間に著された『七湯の枝折』です。これは今で言うガイドブックのようなものですが、ここから温泉場の様子を窺ってみましょう。まず家並の中に屋号が記されている建物が見られます。これらが湯宿です。宿によっては「内湯」を持っているところもありますが、そうでない湯宿では、客は「総湯」、つまり公衆浴場を利用していました。これらの湯宿の人々を中心とする温泉場の人々は、長い歴史の中で温泉を利用する権利を有するようになっていきます。そして同時に温泉の神様である「熊野権現」を祀って、自然の恵みである温泉をととても大切にしていました。したがって、当時の温泉場は温泉、湯宿、そして熊野権現が主要な要素であり、人々は温泉と結びつく中でひとつの社会を形成していたのです。

箱根の近代は、この七湯が十七湯に拡大していった時代であり、これによってほぼ全町が温泉場へと変貌していきました。その意味ではこの間に増加した十湯のさまざまな開発過程を辿っていくことが箱根の近代

箱根町立郷土資料館学芸員 鈴木 康弘

史を考えていく上でのポイントになると思います。新しい保養施設としての別荘は、実はその流れの中で登場してくる訳で、別荘地の開発は温泉場の開発の問題とかなりの部分オーバーラップするのです。しかも湯宿と同じく温泉を利用する以上、どうしてもこれら古くからの温泉場社会に見られた温泉利用にまつわる権利や慣習との関わりがひとつの大きな問題となってきます。このことを順次温泉場開発を追う中で見ていくことにしましょう。

湯宿を巡る温泉場の動き

—湯宿主人たちの経営戦略—

明治という新しい時代を迎えると、箱根も大きく変わっていきます。その先頭に立ったのは先に見た温泉場の人々でした。彼らがまず手掛けたのは温泉場に通じる交通網の整備でした。まず明治8年に湯本福住旅館の主人福住正兄が小田原の板橋から湯本山崎までの人力車道を開削します。この道はその後塔之沢を経て明治20年には宮ノ下、37年には芦の湖畔まで通じることになりました。江戸時代の主要な道といえば東海道でしたが、これにより人々の流れは温泉場を結ぶこのルートへと変わっていきました。重要なのは、これらの費用の大部分を賄ったのが、湯宿の主人たちだったことです。

さらに、道路だけでなく鉄道を敷設しようという声も登場してきます。当時明治政府は東京と大阪を結ぶ幹線鉄道の建設を進めていましたが、そのルートが東海道となったものの最終的に決定されたのは現在の御殿場線のルートで、小田原・箱根地方は沿線から外れてしまうことになったのです。そのため、小田原や箱根の有志たちは小田原馬車鉄道(株)を設立し、明治21年には国府津駅から小田原を経て湯本までを結ぶ馬車鉄道を開業します。この中心にいたのも、やはり福住正兄でした。しかしこの馬車鉄道は、馬が伝染病で相次いで死亡したことや餌代に費用がかかりすぎたこともあって、開業当初から経営は思わしくありませんでした。そこで明治23年に上野で開催された第3回内国勧業博覧会で初めて運転された電気鉄道を導入することにしました。同社は小田原電気鉄道(株)と名称を変更し、資金上の問題や沿線住民の反対運動など数々の困難を乗り越えて明治33年に電化を果たし、日本で四番目の電気鉄道が誕生しました。同時に電気の供給も

行い、その範囲も小田原、二宮、大磯、平塚にまで及びました。

これらはいわば箱根の文明開花でありまして、これを推進することで少しでも多くのお客さんと呼ぼうとしたものです。その中心にいたのが湯宿の主人たちで、これにより温泉場としての箱根が前面に押し出されていくこととなります。

— 新たな開拓者たちの登場 —

こうした動きと平行して注目されるのは、新たな開拓者である横浜や東京の実業家たちの登場です。明治の10年代ころから、箱根に目をつけてここで事業を展開しようとする実業家たちが盛んに見られるようになります。

彼等が箱根に進出していくには、大きく分けると二つのパターンがありました。ひとつは、既にあった温泉宿を買取って、自ら経営していこうとする方法です。代表的な例としては、横浜の実業家山口仙之助があげられます。彼は宮ノ下の旅館「藤屋」を買取り、外国人専用のホテルとして明治11年に富士屋ホテルを開業しました。塔之沢や底倉などでもこうした事例が見られ、これらに温泉場の社会の中心であった湯宿の経営者も様変わりしていくことになりました。

もうひとつは、こうした「七湯」以外の土地を開発していこうとする動きです。代表的な例として小涌谷や強羅が知られています。小涌谷は、もともと小地獄などと呼ばれていたほどの荒涼たる場所でした。しかし、明治10年代に横浜の実業家であった榎本猪三郎・恭三親子らは、底倉村共有地であったこの一帯を買取し、新たな温泉場を作ろうとしました。そして山腹からの温泉引き湯に成功して小涌谷温泉を開きました。

強羅もまた、同じようにほとんど使い勝手のない土地でした。宮城野村では共有地であったその辺り一帯を明治21年に底倉村の旅館主人鈴木牧太郎に売却し、更に東京の平松銀行頭取の平松甚四郎に転売されました。平松は間もなく死去してしまうのですが、その後を継いだのがやはり東京の実業家山脇東助でした。山脇は道路や旅館の建設、早雲山からの引き湯などの開発に尽力しましたが、資金難から志半ばにして工事はストップし、その後は香川泰一に引き継がれました。そして香川の代に小涌谷からの引き湯に成功します。このように強羅では目まぐるしく所有者が変わりながらも、徐々に温泉場としての開発が進められていったのです。

このように、明治時代以降京浜地域の実業家たちによる箱根への投資が盛んとなり、それによって七湯も

少しずつ姿を変え、また不毛の土地であった場所に新しい温泉場も開かれていきました。したがって温泉場の拡大（増加）中で彼らの果たした役割はもっと考えていかなければならないと思います。そして彼らが箱根に進出していく動きの中から、徐々に別荘も彼らの手によって生み出されていくのです。

新しい保養施設・「別荘」の登場

箱根に別荘が初めてつくられたのはいつかと、よく尋ねられますが、実は詳しいことはわかっていません。ただいくつかの史料から見てみますと、比較的早く建てられた別荘のほとんどは外国人によるものです。その意味では箱根の別荘史は外国人によって開かれたといえるでしょう。代表的な人にドイツ人のベルツや明治天皇の肖像画を描いたイタリア人のキヨソネなどの別荘があります。もっとも当時は外国人による土地や家屋の所有は認められていませんでしたから、正確には日本人名義によるものです。注目したいのは、彼ら外国人が温泉に加え、新たに避暑地としての魅力を箱根に発見していったことです。旅行記などを見ても東京の暑さに耐え兼ねた外国人たちは、明治の初めころからすでに箱根へ避暑に訪れていたことがわかります。そして彼らの別荘もまたその延長上であって、涼しさと景色のいいところに建てられたのです。

その一方で、日本人による別荘もこのころから徐々に見られるようになりました。比較的早期の日本人別荘としては、例えば堂ヶ島の平松別荘や塔之沢の大倉別荘、あるいは湯本の今村別荘、岩崎別荘、高田別荘などが挙げられ、いずれも京浜地域の大家実業家であったことが注目されます。しかもその立地を見ますと外国人とは異なって温泉場に建てられることが多く、日本人にとっては、箱根といえややはり温泉が求められていたのでしょう。事業投資とは趣を異にしますがこれなども温泉を手に入れようとする動きのひとつと言えるのではないのでしょうか。

しかしながら、全体の趨勢を見たとき、当時箱根における別荘建設の動きは決して盛んであったとは言えません。当時別荘の建設熱はまだ海浜地域に向けられていました。この周辺で言いますと、小田原、大磯、葉山、逗子などが別荘地として早くから開かれたところで、箱根などの山間部は高原避暑を目的とした外国人を除いて、当時はまだ別荘地の対象ではありませんでした。さらに、温泉利用の面からも少なからず問題も生じていました。古くからの温泉場では基本的にはまだ自然に湧き出る温泉を利用していたので、住民たちはその限られた温泉を確保するために長い歴史の中

で温泉権を得てきたのです。したがって、そこで新たに温泉を求めようとするならば、平松別荘や大倉別荘のように温泉権を持っている湯宿を買い取ってしまうか、あるいは温泉権者とのツテを利用するしかなく、なかなか困難な状況もあったのです。

しかし、明治の末ころになりますと、海水浴の普及と共にこれらの海浜地域が次第に俗化していったこともあり、別荘の立地としては山の方に目が向けられていくことになりました。そして箱根が注目されるようになっていったのです。

観光開発と企業の進出

—小涌谷と強羅の開発—

といっても旧来の温泉場ではなかなか別荘建設は難しいわけですから、別荘地としてはこれとは別の土地が求められていくようになります。その代表的な場所のひとつが小涌谷でした。先に述べたとおりこの一帯は榎本親子が土地を取得し、新たに開発した温泉場です。その後同氏が自分の土地を別荘を求める人々に開放したことから急速に別荘地へと変貌していきました。明治45年に三井総本家が約1万坪を譲り受け別荘「層雲閣」を建設したのを皮切りに、大正年間には次々と大物実業家の別荘が建てられていったのです。この動きの中で、榎本はまさにディベロッパー的な役割を果たしたことになります。これは、ある意味では旧来の温泉場社会にとらわれない、新たな温泉場ゆえに可能であったのではないかと考えられます。

こうした動きを、まさに企業経営の一環として実現していったのが小田原電気鉄道(株)による強羅の別荘分譲でしょう。同社では電気鉄道を開通させたあと、湯本からもっと山の上まで鉄道を敷こうという計画を持っていましたが、資金や技術の問題からすぐには着手できませんでした。やがて、日露戦争が終わるころから実業界の人々の間で、外国人の遊覧できる観光地を作り、外貨を獲得しようという動きが出てきます。そして白羽の矢がたてられたのが、東京からも比較的近い箱根だったのです。そこで小田原電気鉄道に働きかけて登山線を建設し、その第1期工事の終点強羅をそのための観光地として開発しようとしします。その中心となったのが、当時の経済界を代表する三井財閥の益田孝でした。小田原電気鉄道も当初から登山線建設を考えていましたから、彼らの意図に沿う中で実施に向けてスタートし、やがて大正8年に登山電車を開通させました。

一方終点の地強羅は、先のとおり明治末にはすでに早雲山や大涌谷という新しい源泉からの温泉が引かれ

ており、計画当時には20名ほどの実業家たちが共有地として開発を目論んでいました。しかし、彼らは同時に小田原電気鉄道の株主でもありましたから、同社は彼らから温泉使用権と土地を譲り受けることができたのです。土地を入手した小田原電気鉄道は、ここで別荘地としての土地分譲と、強羅公園をはじめとする観光施設の建設を行っていきます。中央に庭園を配した住宅地のありかたは、19世紀半ば以降イギリスで見られた郊外住宅を取り入れて構想されたと言われ、都市作りの面からも注目されるものですが、何よりも箱根別荘史の上からは企業経営のひとつとしてその分譲事業が初めて導入された点で画期的なものといえるでしょう。

土地の分譲は明治45年から開始されましたが、当時の地割図を見てみますと1区画が平均で500坪、地価は安いところで坪3円、高いところで坪10円前後もしました。一例を挙げますと、現在の強羅駅に近い「イ1番」という区画は、坪数870坪で、地価は11,512円でした。これを今の金額にしてどのくらいかよく聞かれます。たいへん難しいのですが、当時の1万円がどのくらいの金額かということを知る例として、この近くにある元箱根村における当時の年間予算を挙げますと、約2,000円でした。単純に比較してはいけませんが、ひとつの村が3～4年も運営できるほどの金額だったといえます。まして中には数区画まとめて買った人もいるわけですから、驚いてしまいます。このように強羅の別荘は、まず普通の人は手が出せるものではなく、それなりのクラスの人でなければ持つことはできなかったのです。実際強羅に別荘を持った人を調べてみると、ほとんどが強羅開発の中心人物であった益田孝と関係ある、政・財界の大物たちでした。このため強羅の別荘を持つことはそのまま特別のステータスを意味するようになったのです。

この強羅の分譲は、小田原電気鉄道にとっては本業の鉄道事業のいわば付帯事業との位置付けだったようですが、その成功によって、これ以後土地開発事業として別荘分譲が注目されるようになった点で箱根の別荘史の上で重要な出来事であったと思います。

—箱根土地(株)と箱根温泉供給(株)—

そのことは、やがて分譲事業を企業経営のメインとする箱根土地(株)の登場につながります。今の(株)コクドの前身です。同社が目をつけたのは、箱根の中でもまだ開発の進んでいない、いわゆる「奥箱根」地域でした。七湯や小涌谷、強羅といった地域が観光地として次第に開かれていく中で、取り残された格好とな

っていた奥箱根の住民の間では開発を望む声が高まっていた。そこに箱根土地が観光開発を掲げて登場したのですから、両者の思惑がある面で一致したわけ。同社は住民たちから未開地として残っていた共有地を譲り受けることによって、分譲事業の前提となる広大な面積の土地確保に成功するのです。

もっとも、箱根土地の事業はかならずしもスムーズに展開した訳ではありません。やはりネックとなったのは交通の不便さでした。そこで同社は交通網を整備するため鉄道の敷設を計画します。その計画とは、当時建設されていた国鉄湯河原駅から箱根までを粘着式鉄道とケーブルカーで結び、さらに箱根からは同社が買収した土地を経由して強羅まで敷設するというものでした。このうち湯河原～箱根間は、大正11年に敷設免許を取得するまでになったのですが、関東大震災や土地ブームも去ったことで同社の経営も苦しくなり、一時計画は頓挫してしまいます。箱根土地ではこの時期、震災復興に伴って注目を集めた東京の郊外住宅に力を注いだようです。

やがて昭和の恐慌がおさまるころ、箱根での事業が再開されます。しかし、今度は自動車時代の到来を予測して同社は鉄道敷設から道路建設へと方向を転じます。熱海と箱根を結ぶ自動車道路の建設を皮切りに、買収地を結んで湖尻線、早雲山線を完成させます。別荘分譲はそれと相前後して昭和10年ころから進めていきました。これにより奥箱根は、箱根土地によって土地開発、交通網の整備の両面が進められることになっていったのです。

企業による別荘分譲の在り方として、もうひとつの事例を挙げてみましょう。これは耕牧舎を母体として発足した箱根温泉供給という会社です。耕牧舎は明治13年、仙石原村住民の共有地のうち約700ヘクタールもの広大な面積の土地を入手して始められた牧場で、その中心となったのは先に登場した益田孝と洪沢栄一でした。ですからこれも実業家による箱根進出の早期の例のひとつと言えましょう。しかし、土地や気候が悪く、また交通も不便であったことから営業成績も芳しくなく、明治38年には閉鎖に追い込まれてしまいました。やがて徐々に仙石原が別荘地として脚光を浴びていくようになると、洪沢らはこの土地を利用して温泉付別荘の分譲を計画し、まず旧耕牧舎所有地を引き継ぐ形で仙石原地所(株)という会社を設立し、分譲事業に着手することとなりました。

そして大涌谷からの温泉の引湯を所有者であった宮内省に申請します。この大涌谷は明治22年に宮内省がベルツの進言を受けて、大温泉場を作ろうと莫大な金

額で購入していました。しかし実際には何もせず、僅かに引き湯を希望する人々に温泉の払い下げをしていた程度でほとんど収入がありませんでした。洪沢らが申請したのはちょうど宮内省でも何とかしようと考えていた時で、大涌谷温泉の有効利用を図るために大涌谷の土地と温泉という現物を出資して洪沢らと共に温泉の供給会社を設立しようとしていました。これによって生まれたのが箱根温泉供給(株)という会社です。この会社の筆頭株主は先の仙石原地所でしたから、事実上温泉給湯と別荘分譲は洪沢らの元で表裏一体に進められていったのです。この時に分譲されたのが温泉荘という分譲地で、名前のとおり温泉付の別荘でした。分譲は昭和8年から開始され、全部で389区画、1区画の平均坪数は200～300坪、坪単価は3～5円というのが分譲内容です。さらにこれに温泉の引湯権として2,500円が加わります。強羅よりは安い感じもありますが、やはり庶民にとっては高嶺の花というのが実情だったと思います。

同時に、箱根温泉供給の設立によって、それまで温泉のなかった仙石原一帯にまで温泉が引かれるようになり、奥箱根の温泉場形成に大きな役割を果たしていくことになったこともまた注目すべきでしょう。

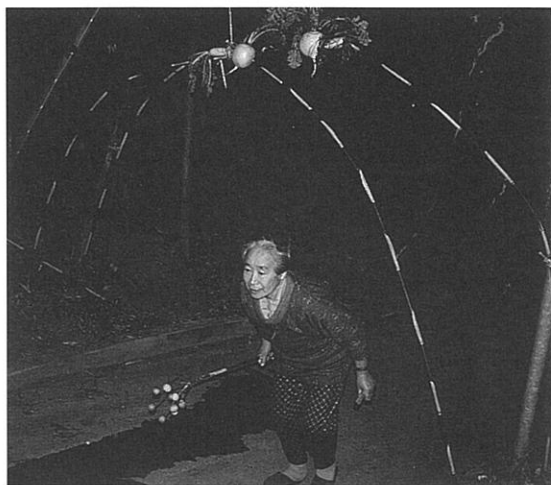
このように、七湯から十七湯へ温泉場が拡大していく流れの中でそれぞれの開発過程を見ていくと、別荘地としての開発の在り方が重要なポイントとなったことがわかると思います。特に明治以降、実業家たちの資本投下により古くからの権利や慣習の残る旧温泉場の温泉とは別の新しい温泉が開発されていったことや開発可能な広大な土地が存在していたことが、大正期以降の別荘ブームの高まりの中、企業の経営戦略としての大規模な別荘分譲の展開へとつながったのではないかと思います。これにより多くの土地が開かれ、また同時に交通網の整備や新しい温泉の利用形態が見られるようになって、箱根が全町的に観光地として整備されていくことになったのです。このように、別荘分譲による開発事業が企業の参入によって大規模に展開されたことが箱根の大きな特徴であり、地域の土地開発のひとつのパターンとしてとらえることができると思います。

舟窪のサイトバライ ～復活した飾り～

セーノカミ、サイノカミなどと呼び親しまれている道祖神は、私たちの生活のなかで、最も身近な神として、大磯町内のいたるところに立っています。そして1月14日におこなわれるサイトバライ（セートバレードンダヤキ、ダンゴヤキ）にも、道祖神への信仰の厚さが感じられます。

ところで、虫窪の舟窪にある道祖神は、長い年月を経て、石碑が倒れたり、ご神体が埋もれてしまいました。道祖神というのは、一般にあらたかだというように考えられており、勝手に手をつけるのは憚られていたようです。しかし、毎年祭りのたびに、また普段その前を通るたびに気に掛けていた人も多かったといえます。そこで、昨年の秋、講中の人たちが自ら発起して道祖神を修復することにしました。まず、埋まっているであろうご神体の数々を掘り起こすことから始まりました。そして、果たして、土の中から五輪塔の残欠や男性器を模した陽石、擦り減った石臼などが大量に出てきました。それらは小気味よく並べられさらに土台を整備し、再び土砂に埋まることのないように、囲いも設けられました。そして、1月14日には披露を兼ねてサイトバライがおこなわれました。

ところで、今回のご神体の修復にあわせて、昔ながらの行事も復活することになりました。もともと、サイトバライでは、この火で焼いたダンゴを食べればカゼをひかない、虫菌にならないと言われています。また、書き初めを燃やして、高く燃え上がれば腕が上がる、燃し残りを家のジョウグチに置いておけば泥棒除けにもなったともいいます。さらに、陰部を火であぶれば、よく陰毛が出るというような数多くの伝承が語られてきました。なかでもユニークなのが、かつては、ダイコンで作った男女の性器を竹につけて門のようにしるし飾りつけたことです。ダンゴを手にした人々は、この門をくぐってからダンゴを焼いたのです。実は、このダイコンでの飾りは、作られなくなって久しいのですが、このたび約20年ぶりに復活することになりました。このような飾りをおこなうのは、今ではたいへんめずらしくなりました。かつて、西小磯のイナリッコ（稲荷講）では、当番の家の門口に櫛を立て、その間にシメ縄を張り渡し、ダイコンでかたどって彩色した男女の性器を吊したといえます。大正初め頃までおこなわれていたようですが、その後風紀を乱すという理由から厳しく取り締まられて廃絶したようです。また、大磯の下町（南下町・北下町）では、ダイコンで男女の性器をつくっていたこともありました。



そして、青年たちが婿、嫁、仲人に仮装して町内の家々へ祝言に歩いて見せてまわったといえます。このようにいくつかの例はありますが、もちろん今では全く見ることはできません。

さて、舟窪の飾りですが、本来は男女1対でしたが今回は道祖神の修復が成ったことから特別に2対作りしました。もともと、誰が作るのかということは決まっていなかったようですが、たいへん年長者が作る事が通例のようです。今回は古正文昭さん、古正富治さんのお2人が手がけたということです。ふつうの細長いダイコンを男性器に、ショウゴインダイコンと呼ばれる丸いダイコンを女性器にみたてて結合させた状態で竹につけます。また、リュウノヒゲを陰毛としてあしらっており、見たところ、いささかエロチックでもあります。しかし、同時にこれは豊穰や生殖のシンボルでもあったわけです。おそらく1年間の豊作や子どもの健やかな成長、そして、子々孫々までの繁栄などを祈りつつ、昔からこの下をくぐってきたのでしょう。

この日は、大磯町内各所でサイトバライがおこなわれました。大磯では南下町、北下町を中心とした、港周辺の下町のサイトバライがその規模の大きさから有名です。しかし、舟窪のように、規模は小さいながらも、素朴な行事とその雰囲気は、祭りを始めたであろう原点に立ち戻ることができるようです。そして、ダンゴを焼く人々は、道祖神を修復できたことで、長年の胸のつかえがとれたような、晴れやかな表情が印象的でした。まだまだ道祖神への厚い信仰は途絶えることはなさそうです。

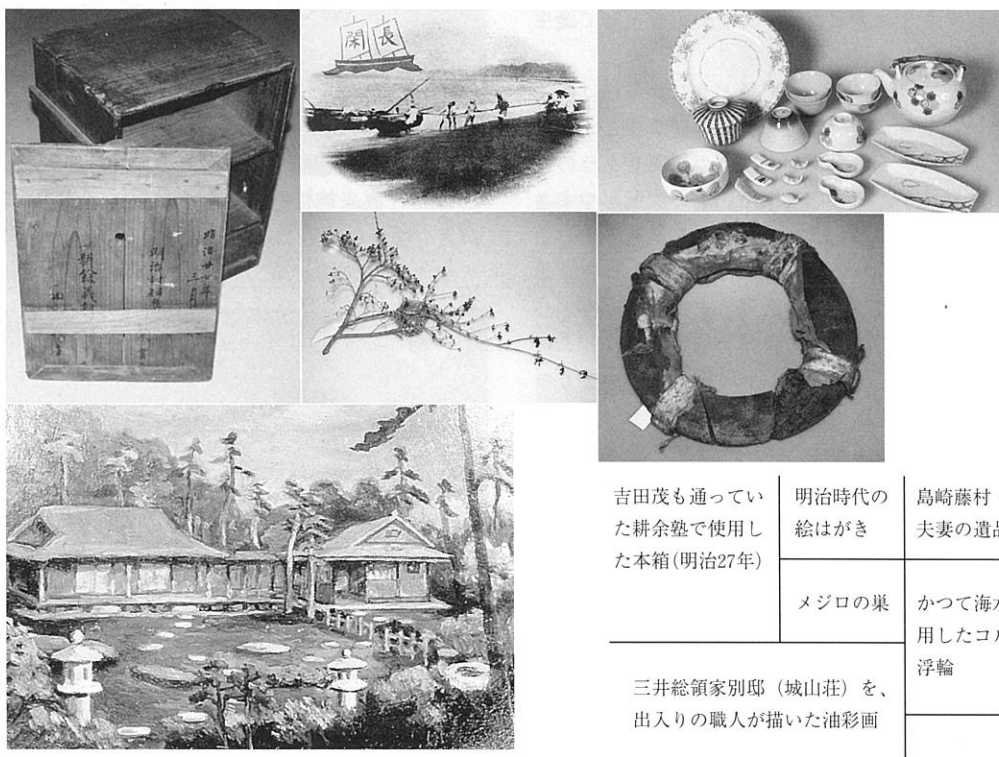
(当館 佐川和裕)

平成7年度の収集資料について

平成7年度も、たくさんの方々のご厚意により、多くの資料を収集することができました。ありがとうございました。

博物館の活動は、資料の調査収集、整理保管、研究活用という3つの大きな柱を基本としてなっています。当館では、その最も基本的な資料の調査収集について、これまでも大磯町内外にお住まいのたくさんの方々のご理解とご協力をいただけてきました。平成7年度（平成7年4月～平成8年3月）における収集資料だけでも、寄贈、寄託、購入、採集などを含めて70件余1000点近くにもものぼっており、資料は量、質ともに充実の一途を辿っています。もちろん、資料が充実することはたいへん結構なことですが、反面、資料が増えるということは、資料の整理に費やす時間もそれだけ多くなることを意味しています。また、限りある収蔵庫への収納方法にも工夫が必要になってきています。収集された資料は、洗浄、補修を経たあと、写真撮影や実測図を作成しながら資料の持つさまざまな情報を蓄積させていかなければなりません。そしてそれらすべての成果として、はじめて展示などへの活用がはかられるわけです。これまでも、特別展や企

画展での展示はもちろん、学級講座などさまざまな場面で活用してきました。しかし、実際に活用できるのは、膨大な資料のなかのごく一部にすぎません。今までも「せっかく資料を寄贈したけれど、展示されない。どうなっているのか」といった声が聞かれることもしばしばありました。寄贈資料は、そのほとんどが寄贈者にとって大きな意味をもっています。学術的な価値云々よりも、むしろ寄贈者自らが愛用してきた品々や、家に代々引き継がれてきたものなど、資料の履歴が大切です。言い換えれば、寄贈者にとって自らの記憶や祖父母、両親の思い出が詰まっているものもたくさんあるわけですから、その後の消息を知りたくなるのは当然のことでしょう。したがって、どんな形にせよ、できるだけ目に見える方法で還元していくことも、ご寄贈くださった方々、しいては資料そのものの供養になるのではないかと考えています。現在、企画展示中の雛人形展もその一環ですが、今後でもできるだけ寄贈資料をご紹介できるような展示を数多く企画するとともに、ご希望があれば収蔵状況も見ていただけるように整理にも力を入れていきたいと思っております。今後ともご理解の程、よろしくお願い申し上げます。



吉田茂も通っていた耕余塾で使用した本箱(明治27年)	明治時代の絵はがき	島崎藤村・静子夫妻の遺品
	メジロの巣	かつて海水浴で使用したコルク製の浮輪
三井総領家別邸(城山荘)を、出入りの職人が描いた油彩画		

海と山と人と ②

バラ科 *Rosaceae*
サクラ属 *Prunus*

春の花といって最もなじみ深いものの一つに、桜の花があります。郷土資料館のある県立大磯城山公園内にもいくつかの桜があり、例年3月末から4月にかけて淡紅色の花を咲かせます（郷土資料館前ふれあいの広場、資料館中庭、展望台から北に向かった所にあるひかりの広場など）。

一口に桜といってもその種類は実に多く、桜前線がよく知られているソメイヨシノをはじめ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、ヒカンザクラ、ミネザクラなどがあります。一般的に桜とは、バラ科サクラ属の落葉高木について呼称されます。共通する形態的な特徴は、花は、紅色～白色をした5枚の花弁で一本の雌ずいに対して多数の雄ずいを持っており、葉は、鋸歯縁になっていることです。そのような共通した特徴以外で葉の形の違い、花弁、葉の色の違いから上記以外にマメザクラ、ニワザクラ、シダレザクラなどが分類されています。

ソメイヨシノについて、少し詳しく説明させていただくならば、ソメイヨシノは、古くからの日本の在来種というわけではなく、江戸の末期、伊豆の植木屋でオオシマザクラとエドヒガンザクラの雑種として誕生しました。

ソメイヨシノ以外にも、在来種どうしの雑種は多くマメザクラとヤマザクラの雑種、マメザクラとオオシマザクラの雑種、チョウジザクラとカスミザクラの雑種などがあります。それらは、遺伝的な交配しやすさということもあるでしょうが、観賞用にとその美しさを求めたことにもより多種になったのかもしれませんが。

観賞用として栽培されてきた桜、古来より人々の心を引き付けるのは、淡紅色の花弁の色合いとほどよい大きさによるものではないでしょうか。今年もまもなく桜の季節がやってきます。

（当館 北水慶一）

引用・参考文献

北村四郎・村田源（1971）；原色日本植物図鑑・本木編（Ⅱ）、1-18、保育社
木村陽二郎（1991）；図説草木名彙辞典、柏書房



県立大磯城山公園のソメイヨシノ



高来神社鳥居横のオオシマザクラ



高来神社境内のヤマザクラ

【トピックス】

◇郷土史講座

本年度の郷土史講座は、湘南オープンカレッジを兼ねて、2月3日・17日の2日間おこないました（前掲講義内容参照）。17日は、午前中の講義に引き続いて、午後から元小田原市文化財保護委員の田代道彌氏を講師にお迎えし、箱根町内の現地見学を実施しました。当日は、あいにくの雪で予定を一部変更し、強羅公園の見学と、園内にある茶室でお話を伺いました。底冷えのする寒い一日でしたが、すばらしい雪の箱根を堪能することができました。



◇国府祭の写真記録展示

毎年5月4日・5日におこなわれる国府祭（このまちは、六所神社を中心に近在の5社の神輿が寄り集まる行事としてたいへん古い歴史をもち、昭和40年には無形民俗文化財として神奈川県から指定を受けています。しかし、祭典会場が複数にわたっていたり、さまざまな行事が含まれているため、一度祭りを見ただけでは全貌をとらえることはなかなかできず、1人で行事すべてを写真撮影しようとしても不可能でした。そこで自主学习グループ「摘み草の会」の有志が、写真による記録化を試みました。写真は祭り当日だけでなく、宵宮はもちろん各神社の準備の様子まで詳細に

撮影されています。これにより、写真を通して祭りを総体的に見ることができるようになり、昨年11月に大磯町文化祭において展示発表されて好評を博しました。そこで今回、同会のご協力を得て資料館にて再び展示をおこなうことにしたものです。国府祭のことを知りたい方、あるいは今年の国府祭にぜひ行ってみようと考えておられる方、国府祭を見る際のガイドとしてもたいへん分かり易くまとめられていますのでぜひ一度ご覧ください。展示は下記の要領でおこないます。

会期 平成8年3月30日（土）～5月12日（日）

会場 大磯町郷土資料館 回廊ほか

◇アンケート

郷土資料館では、館を健全に運営維持していくために5名からなる運営委員会を設置しています。このたび、委員会の席上で、アンケート調査の結果が報告されました。これは大磯町内の幼稚園、小・中学校の教職員を対象に、郷土資料館に対する要望や意見をお聞きしたものです。内容は後述のとおり展示内容や運営など多岐にわたっています。今後、館の活動に役立ててまいりたいと思います。ご協力ありがとうございました。なお、調査、集計は秋野三郎委員（大磯町立国府小学校長）によるものです。

- ・園児は、実際に目でみるだけの展示物だけでなく、手で触れたりできるものの方が興味や関心があるのではないかと。（幼稚園）
- ・常設でなくとも、時には低年齢のための催しなどがあれば利用できる。（幼稚園）
- ・幼児が興味を持てるもの、例えばジャンルが違うかも知れないが、昆虫展や恐竜展などの展示もあるといい。（幼稚園）
- ・大磯町の郷土を築いた人々、ゆかりのある人物に係る資料展示が常設されているとよい。（小学校）

- ・展示物の説明に子どもが読めるようにふりがなをふってほしい。（小学校）
- ・クラブ活動等で見学に行くことがあるので、配慮を願いたい。（中学校）
- ・大磯にいた狸や鳥など動物の剥製を置くなど、展示の模様替えを希望する。（幼稚園）
- ・町民が広く利用でき、親しめる文化的要素のある運営を望む。（幼稚園）
- ・小学生を対象とした特別展示、教科書にあるような内容をテーマにしたものを望む。（小学校）
- ・一般の入場者の中で案内を必要とした時に、対応願いたい。（幼稚園）
- ・まだ見たことのない町民も多いようなので、もっとアピールの方法を考えた方がよい。（幼稚園）
- ・郷土資料館にある資料リストが学校にあると学習材として使いやすい。その際、貸出しの可否を明示してほしい。（小学校）
- ・環境の良い場所に位置している。文化ホール等の建設にいたるまでの資料館の担う役割は大きいので、その存在価値を高めていってほしい。（中学校）

【お知らせ】

毎月1日は、休館日になります

このたび、毎月1日を館内整理日として新たに休館することになりました。これまで、開館中に各種保守点検作業をおこなうなど、利用者の方々には度々ご迷惑をおかけしてきましたが、これらの点を改善していくとともに、これを機会に、常設展示の充実もはかっていきたいと考えています。なお、実施は平成8年4月1日からです。皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。なお、これにより、郷土資料館の休館日は次のとおりになります。お間違のないようお願いいたします。

祝日・毎週月曜日（当日が祝日のときは翌日も）・年末年始（12月28日～1月4日）

毎月1日（当日が月曜日のときはその翌日、1月にあつては5日）

【資料の受入】

（寄 贈）ご協力ありがとうございました。

高麗	中村 藤雄氏	庚申講膳椀一式 他
東 町	佐藤 久雄氏	ハッピー 他
大磯	西海 誠氏	古書籍、手鏡 他
大磯	飯田美智江氏	コルク製浮輪 他
大磯	木村 純子氏	古書籍、鯉職 他
大磯	橋本 嘉博氏	神棚 他
大磯	飯田 福信氏	屏風
大磯	杉山 勇治氏	皿秤り
大磯	碓井 忠夫氏	ホンドタヌキ (剥製)
大磯	原 恒之氏	筥迫 他
西小磯	中山 和也氏	ホンドテン 他
西小磯	渡辺 広平氏	屏風の裏貼 他
西小磯	鈴木 昇氏	サシミ皿 他
国府本郷	加藤 広美氏	雛人形一式
国府本郷	三好 喜平氏	絵画（三井城山荘）
国府本郷	山白 進氏	ハシゴ
生 沢	二宮 肇氏	正月のお飾り
生 沢	二宮 秀雄氏	正月のお飾り
西久保	熊沢 武司氏	唐箕 他
虫 窪	土方 考策氏	正月のお飾り
虫 窪	道祖神舟窪講中	大根のつくりもの
東小磯	加藤三四子氏・星ハルヨ氏	島崎藤村夫妻遺品
平塚市	佐川 信夫氏	正月のお飾り
平塚市	加藤 春雄氏	帽子 他
平塚市	瀬戸トシ子氏	天狗像
東京都	田辺百合江氏	筆草

（採 集）

大磯・二宮町内各道祖神 正月のお飾り

（購 入）

絵はがき、古写真、栞、古書籍

【行事案内】

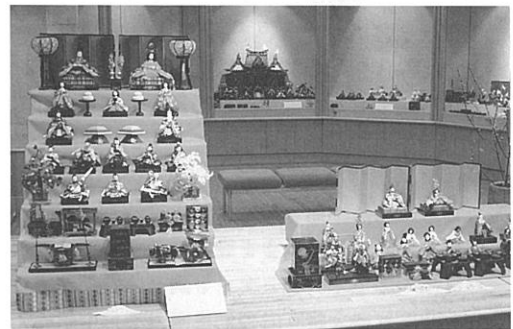
みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。詳しくは町広報をご覧ください。詳しくは町広報をご覧ください。

▼企画展

『雛人形展』（開催中）

2月25日（日）～4月7日（日）

当館に収蔵されている、明治初期から昭和40年代にいたる雛人形と雛道具を一同に公開しています。



▼自然観察会（申込制 定員30名）

6月9日（日）、10月12日（土）・13日（日）

12月7日（土）・8日

▼子ども歴史教室（申込制 定員30名）

8月1日（木）・2日（金）

Report—大磯町郷土資料館だより—No13

平成8年3月30日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

T E L 0463 (61) 4700

F A X 0463 (61) 4660